

児童健全育成賞（數納賞）佳作

児童会館で誕生!! 育ち・育てられ 28年 —母親劇団ぐるーぶえるむの森—

北海道札幌市

ぐるーぶえるむの森 代表 杉 本 明 美

～プロローグ～

今年で28年を迎えた、お母さん劇団「ぐるーぶえるむの森」。私は感慨深く、目の前の公演“おにぎりむすび”を観ている。色々な思い出が昨日のごとく、走馬灯の様に蘇る。誰もがまさかこんなに長く活動するとは思ってもいなかつた。

はじまりは児童会館から

思えば29年前にエルムの森児童会館が行う親子遊び「エルムタイム」の月1回の母親と3歳児の募集チラシを見て、当時引っ越してきて間もない私は、心細さもあり申込み参加した。毎月の歳時記行事にちなみ、毎回グループで、工作、遊びを体験する他に、全体で手遊び、歌遊び、最後に読み聞かせやパネルシアターを館長が行うプログラムであった。私の心細さは、子供が楽しそうに他の子と遊びながら馴染んでいく様子を見ていたらすっかり解けていた。そして、同じ年齢のママ達が沢山いて、子育ての話が出来て心強くもなり、毎月行くのが親子共、楽しみになっていた。月1回が物足りない気持ちにもなっていた。

そんな中、12月のプログラムで、母親がペーパーサポートの劇を作り子ども達に見せるといい、館長が各グループに台本を手渡した。台本を手に取った途端、元々、演劇が好きな私は火がつき、この台本じゃ、グループ全員にセリフが当たらないと思い、一言でもセリフを言って貰つ

たら、子供は喜ぶかなと思い、館長に、「この台本、書き直していいですか？」と伝えたら、「どうぞどうぞ」と。それから私は、ママ達に“セリフ沢山あっていいか、一言くらいにしてほしいか”的要望を聞き、みんなに振り分けし、台本を完成させた。その時の子ども達の目の輝きと、なによりママ達が、とても生き生きしていた様子が嬉しかった。とても楽しい企画だった。それが終わる頃、淋しくなっていたところに館長が「このまま、親子集めて活動してみない？」と言われ、「いえいえそんな人をまとめるとか引っ張っていくとか出来ませんよ」と、腰が引けている私に、「12月の様に劇を作って子ども達に見せるという活動でもいいし」なんて言われ、また“劇”という言葉に火がつき、「それなら、やれそう。でも引っ張っていける自信が～」。館長がすかさず、「1年間はサポートしますよ」なんとも力強い！そして、もう一人一緒に参加していた劇好きな友人と相談し「やります！」と返事をしている自分。こんな風に、自分が先頭に立ち、何かを始めるという事ができる性格ではないのに、“やりたい”という気持ちになった事が驚きで、自分発見のいい瞬間になった。なんといっても導いて下さった館長のおかげです。

今思えば、その頃にはまだ無かった“子育て支援”的な先駆者だと私は思う。

最初の一歩

さて、そうと決まつたら、早速メンバー集め！ まず、前回一緒にやったママ達に声をかける。チラシでメンバー募集を呼びかける。近所のママに直接ピンポンで活動を呼びかける。本来の私には出来ない至難の募集方法。私が一番気になったのが、前回 12 月に一緒のグループだったママが、劇が好きと言っていたので主役をお願いしていたのに、子供の熱で当日欠席。その後、「やりたかったー」と嘆いていたのが忘れられず、まず始めにそのママの家に。でもピンポンするまでに、何度も深呼吸。ふう～。「劇？あの時はいいけど、もういいですよ」って言われそうな気もしてためらい、玄関口に何秒かは立ち止まっていた。いや、1 分は経っていたかな。そして意を決して“ピンポ～ン”。事情を話し、その間ずっと聞いている彼女。とても目が大きくて表情がはっきりしているので、話しながら、好印象で伝わっている気がした。ある程度話し終わったら、即、「楽しそう～いいですよ。入れて下さい。」って。「やったーー！」心で叫んでた。「あの時出来なくて、本当に悔しかったんです。声をかけてくれて嬉しかったです。よろしくお願ひします。」と。ああ、なんて素敵な一日だろう。

そう思っていた自分を振り返る度、まさかその後、彼女とは、大親友になる事になるとは思ってもいなかった。大親友どころか、私と彼女の最後には、一緒に始めた友人には「あなたたちはソウルメイトかもね」と言って貰えるほど。運命が導かれていたんだと思う。

活動のはじめ

さて、いよいよ、活動が開始された。館長に、代表はどちらがやりますか？と言われ、二人ともやっぱり腰が引け、異例の代表 2 人ということに。本当に苦手な分野…。そして、館長からの条件も提示して頂きました。

- ①児童会館での活動場所を提供する
- ②児童劇からではなく読み聞かせから始める事（初心者でも入り易い）

- ③担当当番を設ける（子供にとっても楽しい時間を心がけること）
- ④メンバー全員が役割を持ち、定期的に交替し固定化しないこと
- ⑤児童会館の周年事業には無償で協力すること
- ⑥自分達の子育てが終わっても地域サークルとして子育てを支える事

これらを守ってくれるなら全面的に協力するとの事だ。本当に心強かった。フワフワな私達の背中をずっと支えてくれている感じだった。

私達の活動の出発はとてもいいチームリーダーの確保だ。まず、劇を引っ張っていく 2 名。幼児教育免許を持っていて子供のカリキュラムを引っ張っていく 2 名の 4 名でスタート。結成当時は、20～40 代の母親 25 名が子供を連れて集まり、子供はその二倍位になると、かなりの人数が集まった。みんな何やるんだろうって不安だろうと思ったので、1 年間のプログラムを渡した。最初はみんな緊張ぎみだったけど、物作りや絵本読みを順番にしていたら、何だか、みんな仲良しになり、児童会館だけの時間じゃ物足りないという感じになり、希望者は公園で遊んだりペーパーサートも作ったり、子供たちもとても楽しそうに一緒に遊んでいて、「この時間、子供が早く行こうって言うんですよ。」っていう声が聞けたり、子育ての悩みなども、色々な角度から聞けるので、自分に合ったアドバイスが拾える事が多かったように思う。私も二人目だけど、二人目、三人目の先輩ママが、初めての子育てのママにはとっても頼もしく思ったようだ。転勤で引っ越ししてきたばかりのママも不安が解消されていたようだ。

毎日充実していて楽しい！がみんなの感想だった。

いよいよ劇作り

12 月の“エルムの森児童会館 2 周年”の記念行事に、人形劇団「ひよっこ」という歴史ある人形劇団が公演するので、その前座で、私たちの劇を参加させて下さるということに。

私たちの劇団名は、“ぐるーぶえるむの森”。

このエルムの森児童会館から生まれたので、一番しつくりくる。私たちの演目は「おおかみと3ひきの子やぎ」。いよいよ本番かあ！ドキドキ。

さて、公演に向けての準備に入る。みんな母親なので、本番当日、子供が熱を出し出されない等、色々有るだろうと、ダブルキャストで組む。その為、“おおかみと7ひきのこやぎ”という絵本から台本を作るときに、7匹のダブルじゃそれだけで14人必要になるので、3匹にして、ダブルで組む方向でキャスティングをした。セリフ覚えられるかな～という心配も。大丈夫！大丈夫！なんとかなるさ。

私は近づくにつれ、札幌には全国に誇っている子供の劇場「こぐま座」や「やまびこ座」という劇場があるんだよ。そんな劇場で、いつか出来たらいいねと話し、みんなと夢が膨らんでいた。

はじめての児童会館での本番

初めてメイクして、衣裳に着替えて耳付けたり被り物したり、初めて体験でドキドキみんな。私のいつもの掛け声「とにかく楽しもう～♪」

公演は大成功といつてもいいんじゃないかな。なんと言っても観客の親子が笑顔だったり、子供が大声で応援してくれたり笑ったりしていて、舞台と観客の一体感を感じた。劇好きな私にとっては、お芝居が出来ている嬉しさと、みんなで演れた充実感いっぱい、ウルウルだった。

公演終了後、事務室に呼ばれ、「ひよっこ」とお話ししましょうと。ドキドキ。ひよっこさんの代表は、やまびこ座の加藤館長。私たちが入るなり「いや～お母さん達のパワーはすごいね～」と、満面の笑顔で褒めて下さり、私は観て下さっていたんだと感動。話していくと、「3月に空きがあるから、やまびこ座で演らないかい？」。一瞬、飲み込みも出来ず無音。現実にこんな話が、有るんだろうか。夢かもしれない。頭がグルグル。「私たちが演っていいん

ですか？」「いいよーいいよー。演りなさい。」ウソみたいに3月やまびこ座旗揚げ公演が決定した。みんな帰り道道、私たちが劇場で？本当？緊張する～。楽しみすぎる！

はじめての劇場公演

なんといっても初めての劇場公演。なにも知らないまま、児童会館で12月に演ったセットを持って行く。劇場の照明さんから、「えっ？巻き段ボール？裏、写っちゃうよ。」子ヤギの家の中を巻き段ボールで作り、壁にしていた大道具。「裏？何のこと…？」って思って見たら、○○引越屋の会社名が。みんな大笑い。いや、笑ってる場合じゃなかった。ここは、劇場。照明さんが困っている。「すみません。直します。」そんな波乱の幕開け。それを引きずるかの様に、ハプニング続き。みんな劇場は初めてなので、ド緊張！出間違えやセリフ忘れ、それでも、チームワークの良さもあって、舞台は終えられた。やっぱり観客の反応の良さ、なんと言っても初めて舞台照明を浴びて演じられた充実感。それぞれが、楽屋で語り出した。「楽しかったー」がみんなの一一致した感想！それぞれのママが自分らしく、キラキラした瞬間です。

一步前へ

それからというもの、見切り発車した割りに、ぐるーぶえるむの森がお母さん劇団として、児童会館内でも少し知られるようになって、他の児童会館から公演依頼が来るようになり、私たちも色々な反省を元に、その会場に合わせた舞台作りもしていった。目標も立て、エルムの森児童会館の公演と、やまびこ座での劇場公演。これは、年一度、必ずやりたいね。と、みんなもやりがいになっていた。

そして、なんと、初めての幼稚園公演の依頼も。これは、ちょうど娘が通う市立の幼稚園の担任の先生から「お母さん達の劇団を作るなんてすごい。是非、公演して。」という事になり、実現した。幼稚園での反応という魔物にとりつかれた瞬間だった。幼稚園の子ども達は、園内

で友だち関係が濃いので、誰かが応援し出すと全員で反応。狼が扉をノックすると、子ヤギに「開けちゃダメー」という声が大合唱に。子供の声に潰されそうになりながら、演技を続けていると、子ども達が固唾をのんでこちらに注目している様子が空気で感じる。観客の一体感が、舞台の一体感と競合する。たまらない「生」の舞台を感じる。児童会館や劇場公演でも勿論味わう事が出来る瞬間だけど、幼稚園公演はまた面白いことにも気付く。

それから依頼は、保育園、子育てサークル、養護学校など、色々な所から頂く事になり、貴重な体験を沢山重ねられた。

児童会館と共に地域に根ざしたい

私は、このグループが出来た時に、一番の願いは、地域の皆さんのが気軽に参加したり、楽しみにしてくれる場になりたいと思って活動していきたいという想いだった。児童会館に来る子ども達が、“ここへ来ると、劇が観られるよね。”と、劇を身近に感じてほしいなと思っていた。絵本の読み聞かせの様に、気軽に劇を観て、生ならではの体感を味わって欲しいなと思っていた。ただ、劇は舞台を組んだりするので、場所も時間も使うので、せめて年に1～2度の公演は続けようと思い、4月の新入生歓迎会の時、12月のクリスマス会の時は、出来る限り続けていた。

そうしていると、親御さんから、「ぐるーぶえるむの森さんが、公演してくれるので、毎年楽しみなんです。」と、おっしゃって下さる声も聞くことが出来たり、子ども達からも「えるむの森だあ」とキラキラな目で言わされたのは感動でした。地域に少しでも密着出来たと思い、嬉しかった。児童会館で生まれた劇団ということが誇りになれるよう、頑張ろうと思った。劇ばかりではなく、なにか児童会館へ行くと、“えるむの森が遊んでくれる”という場になるのは理想だった。子供たちと“生”で触れ合いたいという原点だ。それが、28年経って実現したのが、“あそべるえるむ”だ。これについては、

後に書きたいと思う。

10周年公演からのえるむの森

少しずつ活動を知って頂くようになり、忙しい時は、1日で2カ所回り、演目は3公演。午前と午後は作品が違うので、役も違う。若い勢いで出来たんだと、今は思う。

ぐるーぶえるむの森結成10周年！1994年から立ち上げ、2003年の時、2004年で10周年になる記念の公演にしたい。そんな時に、ふと天から下りてくるような感じでオリジナル作品が浮かんだ。今まででもオリジナル作品を生んでいたけど、結構みんなの意見も聞き入れていた。今回は、相棒（初めてのメンバー募集でドキドキのピンポンでメンバー入りしてくれた彼女。この頃には、お互い相棒と呼んでいた）と2人でタッグを組んでストーリーを考えた。次々浮かぶストーリー、夢にまで出てきたストーリー。“今、観て下さる方に何を伝えたいか”がはっきりしていたので、作品作りにもブレが無かった。楽しくて仕方なかった。いよいよ公演が近づいてきた日、ハプニング！この私が入院という事に。10周年記念公演なのに日程はずらせないという私に相棒が、代替え公演にしよう。と言い、私を説得。確かに退院したとしても、演出を兼ねていた私なので、公演の遅れは取り戻せないのは明らかだった。“大切な作品だからこそ、焦らずゆっくりいい作品にしたい”みんなも反対はなく、今できる精一杯で代替え公演を終えた。

病気らしい病気をしていなかった私が、入院だけでもショックだったのに、公演にまで影響を及ぼしてしまうとは、かなりの打撃だったけど、みんなの熱い思いでかなり救われた。みんなの団結力にも感動な私。今思えば、この時の入院から私の病は始まっていたんだなと思い返す。

そして、その8ヶ月後、いよいよ10周年記念公演“つよお～いもの”が上演された。これを成功させたいという全員の思いがまさに一致団結となり、観客に伝わった。今までの集大成

になり、これから作品の指針にもなった。やはり人と人は“愛”が原点。いろんな愛を伝えていきたい。

地方の子ども達の元へ

活動も10年が過ぎた頃、ふと耳に入ってきた言葉が、みんなを大きく振り動かした。それは、札幌郊外の小学校の子ども達が、「劇を観たことがない」という。私にはかなりの衝撃的な声で、心が揺さぶられ、そのままメンバーに伝える。みんなも衝撃を受け、「観たことないなら、観せよう！観て貰いたい！」熱い仲間なので、そうなると思っていた。

全校生徒13名の余市の小学校。初めての地方公演になる。いつもは、赤帽さんに大道具を積んで貰い、児童会館や幼稚園に行っているが、今回は余市。そんなに遠くまで運ぶには、かなりの運送料になる。勿論払えない。余市の小学校へは、私たちの思いで行かせて頂くので、ボランティア公演だ。荷物をうまくコンパクトにまとめながら、車に分担してなんとか行くことが出来た。着いた小学校は、タイムスリップしたような校舎だった。私が小学校の頃に通っていた校舎の様で、とても愛着があった。みんなも、「わ～いいねえ」と。

車を降りると、子ども達が出迎えてくれていた。目がキラキラな、そして、何をするんだろうという好奇心いっぱいの顔で、無邪気な笑顔が、堪らなかつたのを覚えている。広い体育館に、ちょこんとまとまって子ども達が座って、劇の始まりにワクワクしているのが伝わってくる。すごい集中力も伝わってくる。劇が始まると、等身大のヤギや狼に、一瞬びっくりしたような感じだったが、すぐ馴染み、届託無い笑顔で観ている。一緒にハラハラしたりワクワクしたりドキドキしたりも伝わってくる。終わってからの子ども達の表情もなんとも開放感いっぱいで、「来て良かったー」みんながそう言い、帰りの道々のドライブも楽しみながら、帰ってきた。「また来てね」子ども達にそう言われて、迷わず「また来るねー」。それから閉校までの

3年間、毎年通った。キャストに興味が湧いた子、裏方に興味が湧いた子、私たちの活動に興味が湧いた子、様々だが、これから大人になっていく子ども達のきっかけに何かなってくれたら、嬉しいなと思う。

小説「あらしのよるに」との出逢い

10周年から、益々、相棒とのタッグでのストーリー作り、キャストとしてのタッグで、みんなを引っ張っていくという体制が定着してきた頃、絵本の「あらしのよるに」と出逢う。続きが気になり、相棒と図書館へ行って、読みふけった。“これ演りたい！これしかないよ！”2人の意見は一致した。みんなも賛成。

2009年、絵本より第一巻、第二巻を脚本化。舞台にし幼稚園公演に。人気の舞台となった。その内、私は作者にサインを求め講座を行った時に、この絵本に小説がある事を知り、即買い求めた。

あっという間に、その小説に入り込み、“これ演らなきゃ！”相棒に連絡し、読んで！と。相棒も、“演りたい！”。こんなに深い愛の話、伝えて行きたい。15周年記念公演に決めた。長いお話、カットなどどれもしたくなかったけど、このまま脚本にしたら3時間にはなるお話。泣く泣くカットして、えるむらしい脚本に仕上げた。

そんな中、作者からお誘いがきた。東京の椿山荘で“あらしのよるに”的イベントやるので、そこで劇してもらえない？と。夢のようなお誘いだった。何度も何度も相棒と「夢じゃないよね、夢じゃないよね」と。

私と相棒と2人で行き、大宮に転勤になつたメンバーが音をやるということで3人で演



る事にした。「こんな事があるんだろうか」と夢心地のまま、稽古を重ねていたら、相棒に変化が。腰が痛そう。聞くと、大丈夫という。東京行きが近づくにつれ、益々悪化。さすがに相棒も痛さが顔に出てきた。誤魔化しようがなくなっていた。ダンスをやっている相棒はよく腰を痛めるので、そのせいだと言っていて、整骨院でマッサージするし、痛み止めも貼るから大丈夫と。「出演断ろう。」という私に、全く耳を貸さなかった。「大丈夫だから！」と。東京行きが近づくと、実家が東京にある相棒は早くから東京入りしていて、その何日後かに合流。明日が本番という日、音合わせに大宮のメンバー宅へ行った時には、もう痛みで歩くのでさえ困難な状態。見ていられなくなり、「断ろう、これはもう無理だよ」そういう私に半ば、怒りまで顔に出し、「大丈夫、絶対演る！」引き止める私に、今度は「演らせて。演りたいの。」大きな強い瞳で訴えてくる。負けた。「わかった。じゃ、演出変える。」相棒は、椅子にずっと座つて貰うこととした。私が座ったり動いたりしながらすれば、出来る。公演は、成功。不自由も感じなく、そういう演出だと誰もが思ったようだった。子ども達が食い入るように見ててくれて嬉しかった。安心したのか、その夜、相棒が痛みで動けなくなり救急車で運ぶ事になった。相棒の病気は癌だった。

札幌劇場祭 “サプライズ賞” 受賞

そのまま入院になり、3ヶ月後に公演があるという相棒に医師は、「公演は絶対無理ですよ。」負けん気の強い相棒は、ひるまない。無理というなら、演ってやろう魂に、相棒は火がついていた。

入院中も台本を抱え、稽古するという。中庭へ行ったり、廊下の片隅へ行ったりしながら。ずっと読み稽古を進める。「公演は延ばそう」という私に、絶対演るときかない相棒。何度も交渉の結果、演出を変えよう。ガラッと変えればできるかもしれない。車椅子と歩行器でしか動けない相棒。舞台を平坦にすれば出来る。

元々、この芝居は、15周年記念公演だし、作品がいいので、多くの観客に観てほしいのと、この作品に向けての情熱は誰にも負けない勢いがあったので、初めて、札幌市で企画している“札幌劇場祭”というものにエントリーしてみた。賞がどうこうではなく、宣伝下手な私たちが、より多くの人に知つてもらうのにいいきっかけになるかもと思ったので、挑戦してみた。なんといつてもプロの劇団や、力のある誰もが知つてアマチュア劇団や、オペラなどもエントリーしているのだ。ジャンルまで様々なので、色んな人に観て貰えたらいいなと思った。

舞台は、私たちが持てる全ての力を、みんな彼女を舞台に立たせたい一心で、全員一致団結で臨んだ。相棒も医者を驚かせる程、全力を注ぐ。みんなの力が一つに固まっていた。舞台は大成功。沢山の観客が涙して感想を告げてくれた事が嬉しかった。

そして、びっくりしたのが、このお芝居に賞が頂けた事だった。“サプライズ賞”！審査員特別賞で、急遽設けて下さった様だ。「お母さん劇団」という事で悔っていました。すごかつた。是非、賞を与えた」と言って下さり、これには、涙した。私たちの思いが伝わったんだと。沢山舞台を観ている審査員の方々にそういう頂けて、本当に幸せな瞬間だった。

相棒がお空に

奇跡の舞台は、3公演続いた。翌年には、作者にも観劇して頂いた。相棒も元々の演出、舞台で演りたいといい、ある程度、舞台も組んでの公演。作者がとても舞台を褒めて下さった。そう、数え切れないほど、舞台化されていると思われる「あらしのよるに」。それを観ている作者が、「素晴らしい。作者も思いつかない演出だったり、役者が良かった」と随分褒めて頂けた。私たちの永遠の心の支えになった。

そんな相棒も奇跡と言われながら家族の承諾を得て、舞台も演じきり、お空に旅立った。

抜け殻になった私は、なにも出来なくなり、動けなくなった。そんな時に、えるむのメンバー



が、みんなで相談しながら一致団結で、依頼を受けていた公演をやり遂げた。本当に支えられた。みんなも仲間を失った大きな損失感でいっぱいだったので、えるむの森をしっかりと動かし続けてくれて心から感謝な日々だった。この時のメンバーの団結が、今のえるむの森の力の源になっているんだと思う。

児童会館でできること

今までの、相棒と2人で引っ張っていくという姿勢を変え、みんなで動かしていくえるむの森へと変化をしていく。それが今のえるむの森にとって、とてもいい状態を生んでいる。

まずは、児童会館の子ども達との共演。前から行っていたけど、定着させたい。児童会館に通う子ども達と一緒に公演をする。子ども達の表現する場になるといいな。一人一人の自信に繋がるといいな。

そして、地域に根付く活動の一環として、児童会館のお祭りの参加。年一度行われるエルムまつりは、地域の方々が集まり取り組まれていることも知り、それは是非参加させて頂きたいと、自分たちで出来る事を考え参加している。毎年楽しみになり、ゲームコーナーや読み聞かせなど、子供と一緒に遊べる楽しいお祭りタイムになっている。

コロナ禍になり、お祭り活動も出来なくなり、子ども達と触れ合うことが少なくなってきた今、子ども達に思い切り遊んで貰いたいと思い、児童会館に相談。快く受け入れて下さり、今は月に1回、“あそべるえるむ”という時間枠を頂いた。児童会館の館長始め、職員さんには感謝でいっぱい。そこでは、紙飛行機を作って一緒に飛ばしたり、ゲームやクイズをしたり、時

折ミニ劇場を観て貰ったり、毎月色んな遊びを提供し、無理強いではなく、遊びたい子が集まってくるという時間にし、子ども達が生き生き遊ぶいい時間になっている。

これこそ、劇団を立ち上げた時に、“児童会館へ行くとなにか面白いことやってるから行こうかな”と気軽に来て貰えたらいいなと思っていた一つが実現した。

続けてこられた応援の力

最近歴史を感じる事で嬉しい事があった。初めての幼稚園公演を行った幼稚園から公演の依頼だ。その当時、娘の担任だった先生が園長になり帰ってきて、園の周年行事に呼んで下さったのだ。28年後の公演に感激。同じく幼稚園公演では、1999年から23年、毎年依頼して下さる幼稚園があり、その時の園長が、母親の集まりで内容も子ども達に寄り添っていて演技も道具も素晴らしい。応援したい。と、園長が替わった今でも受け継がれ公演をさせて頂けて、感謝一杯です。

28年活動を続けていると、ささやかだが、活動を知って頂ける事ができて色々な出会いもある。その中で最近、コロナ禍もあり稽古場探しに苦労している私たちに、今、ご自宅を開放して下さる方がいる。その方とは古い付き合いで、えるむの森の劇を愛して下さり、色々な依頼を持ってきて下さったり宣伝して下さったり、本当に感謝してもしきれない方だ。その方は、二世帯住宅のご両親が他界され、空き部屋になった場所を、これから色々な団体に開放し活動をしていくと精力的な活動をされている方だ。その方に相談を受け、今、不登校の子達に解放し、一緒に時間を過ごしたりする中で、えるむの森で、何か一緒にできないかしら？というお話を頂き、不登校の子がもし少しでも興味をもって、何かやってみたいと思って貰えたらしいな、何かやってみて自信に繋がったらしいなと、色々思いが溢れてきた。これから活動になるが、繋がっていけたらいいなと思う。

そしてなんといっても、この劇団が生まれた

時の助産師と私は呼んでいる当時の館長が、今も変わらず私たちの活動を見守って下さる事がどんなに励みになっていることか、感謝してもしきれない。今まで続けてこられたのも本当に沢山の方々が支えて下さっているからだ。えるむの森は幸せ者だ。

～エピローグ～

大きな手拍子が会場に広がっている。エンディングの面白いキャストの動きにみんな大笑い。ジュニアの子のダンスに歓声や拍手。温かい拍手で舞台は幕を閉じる。観客の皆さん顔はみんな笑顔。温かい空気いっぱいに包まれている。私の夢は、“えるむの森の劇を見てみたい！”ずっと役者だった私の夢が叶った。そしてもう一つ、劇団を立ち上げた頃、相棒と、いつか自分達の子供が大きくなって母親になって子供を産んだ時に、3世代で舞台に立てたら最高だね。夢だね。そういっていた3世代が舞台に上がっている。夢は叶うんだ。

夢が叶って胸いっぱいの私が、今、厳しい病気と闘っている。負けない。ぐるーぶえるむの森がこれからもずっと、ささやかな活動でも、子供や子育てをしている親御さんに少しでも笑顔になれる場で続していく事を願って。